

Y君との小さな庭

高田 外亀雄 北海道亀田郡 七十三歳

Y君にひまわりの花の絵を見せて、ひまわりを育てようと呼びかけた。彼は即座に「へんなの」と拒否した。ここはひまわり学級である。そこでひまわりの栽培を提案したのであるが、彼は全く興味を示さなかった。

種蒔きの都合上、見切り発車した。一辺が一メートル程の正方形の小さな庭にひまわりを育てることにしたのだ。スコップで土を起こし畝を盛り、「Y君も手伝って」「へんなの」彼は見守るだけだった。畝に種を蒔く時、「Y君も種を蒔いてよ」また「へんなの」であった。彼は全く変わらなかった。

へんなの、は続いた。「芽が出たよ。みてみて、かわいいね」「本葉が出たよ」と知らせても、やはり「へんなの」であった。

つぼみが膨らみ、ある一本のひまわりに花が咲いても、また「へんなの」であった。やがてひまわりの花が次々と咲き、小さな庭は黄色い花でいっぱいになった。うあー、満開だ。黄色いじゅうたんだと僕が叫んだ時、彼が『すごいね』と言ったのである。えっ、と彼を見た。恐らくひまわりの花の美しさが、彼の心をゆさぶって咄嗟に出た心の叫びだったと思われる。

さらに、花びらが枯れ落ちて種が実ると、すずめが実を食べ出した。種は瞬く間に食いつくされた。するとである。彼が教室の窓から『すずめさん、だめ』と注意したのだ。

へんなのとすごいねの単発の二語しか言わない子が、主語と述語を備えた一文を言ったのである。僕は花に秘められた力に驚き感服したのである。